

増殖性腸症の原因菌 *Lawsonia intracellularis* への感染が疑われた
カリフォルニアアシカの死亡例

○和田 夏海¹⁾, 下田 宙²⁾, 櫻井 優³⁾, 近藤 圭佑¹⁾

(¹⁾ マリンワールド海の中道, ²⁾ 山口大学共同獣医学部獣医微生物学教室, ³⁾ 山口大学共同獣医学部獣医病理学研究室)

増殖性腸症は偏性細胞内寄生性細菌 *Lawsonia intracellularis* (LI) を原因菌とし、遠位小腸および近位大腸の粘膜の過形成による肥厚を特徴とする疾病として知られている。ブタにおいて本病は肥育末期あるいは繁殖候補個体に発生し出血性下痢を伴って急死する急性型と、離乳期から肥育期にかけて軟便や下痢が持続し体重が低下する慢性型の二つの病型に分類される。慢性型の中には症状は示さないが増体重に影響が出る不顕性感染型と呼ばれる病型も存在する。LIはウマ、ヒツジ、ウサギ、マウス、フェレット、キツネ、イヌ、シカ、ダチョウ、サルなど、ブタ以外の多くの動物にも感染することが知られているが、海棲哺乳類への感染例はこれまで報告がない。マリンワールド海の中道で飼育していた雄のカリフォルニアアシカ *Zalophus californianus* (個体名：ポット、死亡時15歳)は、2歳齢より間欠的に腹痛姿勢や下痢、嘔吐が確認され、治療する機会が度々あった。当個体は2023年2月16日に容体が急変し死亡した。解剖にて直接の死因であると考えられる直腸部の捻転と、加えて小腸の粘膜に重度の出血を認めた。小腸部位は病理検査の結果、組織学的に増殖性腸炎像が確認された。ワーチン・スターリー染色標本では病変部に菌体を確認できなかったが、生前採取し凍結保存していた便検体のPCR検査によりLI遺伝子陽性を確認し、LIへの感染を疑う結果となった。感染経路は感染個体の糞便から、もしくは野ネズミの侵入によりそれらの糞便からの感染などが考えられるが、詳細は不明である。当館では他に症状を呈している個体はおらず、別の雄個体1頭の糞便PCR検査を実施したが陰性であった。今後はカリフォルニアアシカもLIに感染する動物であるとして診断・治療・予防を行う必要があると考える。